

友人関係への依存度と拒絶のサインへの鋭敏性 —— 共同規範と交換規範による差異の検討 ——¹

立教大学現代心理学部 宮崎 弦太
大阪市立大学大学院文学研究科 池上 知子

Dependence on friendships and sensitivity to rejection cues: Differential moderating effect of communal versus exchange norms

Genta Miyazaki (College of Contemporary Psychology, Rikkyo University), and
Tomoko Ikegami (Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University)

This study examined whether dependence in relationships differently affects sensitivity to rejection according to norms observed in one's relationships. We hypothesized that dependence on relationships will enhance sensitivity to rejection among individuals who adhere to exchange norms (i.e., individuals with a strong exchange orientation or avoidant attachment style); however, the tendency will reverse among those who adhere to communal norms (i.e., individuals with a strong communal orientation or secure attachment style). The results from two questionnaire studies (Study 1: 149 participants; Study 2: 189 participants) revealed that among women with an avoidant attachment style, higher levels of dependence on one's friendships predicted greater sensitivity to rejection by their friends (Study 2). In contrast, higher levels of dependence predicted lower sensitivity to rejection among men with a strong communal orientation (Study 1) and women with a secure attachment style (Study 2). These results suggest that the meaning of dependence differs by norm type, which alters the way in which dependence determines sensitivity to rejection cues.

Key words : dependence on friendships, sensitivity to rejection cues, communal norms, exchange norms.

親密な人間関係を維持するためには、相手が自分のことをどのように評価しているのかを適切に読み取る必要がある。我々は、関係相手が自分の気持ちや欲求に関心を持っているかどうか非常に敏感であり、相手が自分に関心を持っていないことを察知すると、心理的に傷つき、自尊心が低

下するなど、ネガティブな感情を経験しやすい (Smart Richman & Leary, 2009; Williams, 2009)。このような相手からの拒絶 (rejection) によって生じたネガティブな感情は、警告信号として働き、関係悪化のサインを見逃す危険性を低減させると考えられている (Leary, Tambor, Terdal, & Downs,

¹ 本論文の内容の一部は、日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会および日本心理学会第 76 回大会で発表されている。本論文の研究 2 は、第一著者が平成 23 年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部を加筆、修正したものである。また、研究 2 で使用したデータは、宮崎弦太・田端拓哉・池上知子が 2010 年に都市文化研究 12 号 (pp.77-84) に報告したデータおよび田端拓哉・向井有理子・宮崎弦太・池上知子が 2012 年に都市文化研究 14 号 (pp.70-79) に報告したデータと一部重複している。ただし、いずれの論文においても愛着傾向と拒絶のサインへの鋭敏性は分析に用いられておらず、本論文ではこれらの変数を含めた新たな分析結果を報告した。

1995; Williams, 2009)。ただし、我々はどのような関係においても拒絶のサインに対して敏感なわけではない。近年の研究より、拒絶のサインへの敏感さは二者の関係性による違いがあることが明らかになっている。本研究は、拒絶のサインへの鋭敏さに影響する対人関係の特徴として関係への依存度 (dependence) に注目し、その影響の境界条件を明らかにする。

関係への依存度と拒絶のサインへの鋭敏性

ある関係から得られる恩恵 (benefits) への依存度が高いとき、関係相手の示す拒絶のサインへの鋭敏性が高まることが知られている。たとえば、村落居住者は、都市居住者に比べ、親友と共有する社会的役割 (e.g., 仕事仲間、仕事以外の活動のメンバー) が多い傾向にあるが、そのため村落居住者のほうが、親友の曖昧な拒絶のサイン (会話中の相手の沈黙) にネガティブな感情反応を示しやすいことが見出されている (宮崎・金児, 2007)。また、親友と共に行う活動 (e.g., 大学の試験勉強、サークル活動、ショッピング) が多い人ほど、親友からの非明示的な拒絶場面 (e.g., 相手が自分と視線を合わせない) でネガティブな自己関連感情を経験しやすい (宮崎・池上, 2011)。特定の相手と役割や活動を多く共有することは、多様な役割関係や活動を通して、相手と様々な資源のやりとりを行うことにつながる。そのため、他の関係では得られない恩恵をその関係から得られるようになり、関係への依存度は高まる (Thibaut & Kelley, 1959)。そのような関係を失うことは自己に大きな損失をもたらすため、関係維持への動機が強まり、拒絶のサインに対しより敏感になると考えられる (宮崎・池上, 2011; 宮崎・金児, 2007)。

同様の知見は、Lemay, Overall, & Clark (2012) の研究でも得られている。この研究では、親密な二者関係のなかで心理的な傷つき (hurt feeling) を規定する要因とその帰結が検討され、関係へのコミットメント (commitment) が強いほど、相手の拒絶的な言動に対して心理的な傷つきを感じやすいことが示されている。コミットメントは、

ある関係への依存の程度についての主観的な評価として生じ、その関係を維持しようとする動機づけの強さに大きく影響する (Rusbult & Buunk, 1993)。そのため、上記の研究と同様、Lemay et al. (2012) の結果も、関係への依存度による関係維持への動機づけの違いが、拒絶のサインへの鋭敏性を規定することを示しているといえる。

関係への依存度が拒絶のサインへの鋭敏性を高めるという知見は、相互依存理論 (interdependence theory: Thibaut & Kelley, 1959) と一貫している。相互依存理論では、ある二者関係における我々の感情や行動は、その関係のなかで得られる利得と被る損失、そして二者間の利得と損失のやりとりの相互依存性によって規定されると考える。我々は、関係相手からの拒絶に対し、その相手との関係のなかで自分がこれまで得てきた利得、そして、その関係を失ってしまうことで自分がこれから被る損失の大きさの評価に応じて自身の反応を変化させている。関係への依存度に応じて拒絶のサインへの鋭敏性を変化させるメカニズムによって、我々は、自分にとって必要不可欠な関係を維持しやすくなっていると考えられる (宮崎・池上, 2011, 2015)。

関係規範による差異

しかし、我々は、常に関係がもたらす利得やそれを失うことによる損失に結びつけて関係を評価しているわけではない。Clark & Grote (1998) は、対人関係における恩恵のやりとりに関わる規範 (i.e., 関係規範) には、互いのやりとりがもたらす利得と損失を勘案し、恩恵のやりとりにおける公平性を保つことを重視する交換規範 (exchange norms) とは異なる規範が存在することを指摘している。それが、相手が必要なときには、自分が被る損失を顧みず、相手の福利 (welfare) のために恩恵を提供するという規範である (Clark & Grote, 1998; Clark & Mills, 1979, 2012)。このような規範は、共同規範 (communal norms) と呼ばれる。これまでの研究から、共同規範が強い場合、相手の求めに応じて、自己が被る損失を顧みずに相手の利益になる行動を行うことが明らかになって

いる。

たとえば、共同規範を遵守しようとする傾向の強い人（i.e., 共同規範志向性 [communal orientation] が強い人）は、親友や配偶者が自分に対して怒りを表した場合に、相手への援助を行いやすい（Yoo, Clark, Lemay, Salovey, & Monin, 2011）。相手の怒りの表出は、自己に損失をもたらす行為であるが、共同規範が強い場合、その行為を損失という点から評価せず、むしろ、怒りの背後にある相手の欲求や望みに関心を向ける。また、恋愛関係のなかで共同規範を遵守する傾向の強い人ほど、自己利益を犠牲にして相手のためになる行動を行ったときに、ポジティブな感情を経験し、関係満足度が高まる（Kogan, Impett, Oveis, Hui, Gordon, & Keltner, 2010）。さらに、共同規範への志向性が強い人は、親密関係のなかで不公平を知覚しても関係満足度は低下しない（Buunk & De Dreu, 2006）。

これに対して、交換規範を遵守する傾向の強い人（i.e., 交換規範志向性 [exchange orientation] が強い人）は、親密な二者関係のなかで相手のほうが得ている利得が多い、自分のほうが被る損失が大きいなどの不公平を知覚すると、ネガティブ感情が生じ、関係満足度が低下しやすい（Buunk & Van Yperen, 1991; Sprecher, 1992）。交換規範が強い場合、ある他者との関係が、相手とのやりとりによって生ずる利得と損失という点から評価されやすいといえる。

以上のような関係規範による差異を考えると、我々が二者関係のなかで感じる感情や関係に対する評価は、利得と損失によって常に規定されているわけではないことがわかる。このことは、関係における相互依存性が高くても、拒絶のサインへの鋭敏性が高まらない場合があることを示唆している。つまり、共同規範が強い場合、関係への依存は、利得と損失という点からは評価されにくく、拒絶のサインへの鋭敏性を高めにくいと予測される。むしろ、関係への依存によって、拒絶のサインへの鋭敏性が低下することも予想できる。たとえば、相手と役割や活動を多く共有する場

合、共同規範に基づき相手の立場に立ったやりとりを行うことで、相手の様々な視点（perspective）やアイデンティティが自己の内部に取り込まれ、自他が一体化した強固な関係と評価されるようになる可能性がある（Aron, Aron, & Smollan, 1992）。そのような強固な結びつきのもとでは、相手から拒絶されることを懸念する必要はなくなり、拒絶のサインへの鋭敏性は低減するだろう。一方、交換規範が強い場合、関係への依存は利得と損失という点から評価されやすいため、先行研究（e.g., 宮崎・池上, 2011）と同様、拒絶のサインへの鋭敏性を高めると予測される。

対人関係において共同規範と交換規範をどの程度志向するかには個人差があることが知られている（Clark & Mills, 2012; Clark, Ouellette, Powell, & Milberg, 1987; Mills & Clark, 1994）。そのため、関係への依存度が拒絶のサインへの鋭敏性を高めるかどうかは、個人の共同規範志向性と交換規範志向性によって調整されることが予想される。さらに近年では、個人の愛着傾向によっても優勢な関係規範が異なることが明らかになっている（Bartz & Lydon, 2008; Clark, Lemay, Graham, Pataki, & Finkel, 2010）。安定した愛着が築かれた関係では、相手が自分の欲求に受容的に応答してくれるという信頼が高いため、親密関係の理想とされる共同規範に従いやすい（Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010）。これに対して、愛着関係における回避傾向が強い場合、相手の応答性に対する信頼が低いため、相手と親密になることを避けようとする。そのため、相手と一定の心理的距離を置く交換規範を遵守しようとする（Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010）。愛着関係における不安傾向が強い場合、相手と親密になることを強く望みながらも、相手から受容されることへの自信を持ってない。そのため、共同規範を遵守しようとしながらも強い葛藤が生じ、共同規範と交換規範が拮抗する（Bartz & Lydon, 2008）。したがって、安定的な愛着スタイルを保持する者は、共同規範を遵守する可能性が高く、関係への依存が強いほど拒絶のサインに対する鋭敏さは低下する傾向がみられ、

回避的な愛着スタイルを保持する者は、交換規範への志向が強まりやすいために、関係への依存が強いほど拒絶のサインに対して敏感に反応するという傾向がみられやすくなることが予想される。

拒絶のサインへの鋭敏性を規定する二者関係の特徴に関しては、これまで相互依存理論の枠組みの有効性が確認されてきた (e.g., Lemay et al., 2012; 宮崎・池上, 2011)。これに対して、遵守されている関係規範、あるいはそれを反映すると考えられる愛着スタイルによって、関係への依存度が拒絶のサインに対する反応に及ぼす影響が異なることを明らかにすることは、拒絶のサインへの鋭敏性が単一のメカニズムによって制御されているわけではないことを示すことにつながる。拒絶のサインへの鋭敏性を規定する要因についての包括的な理解に向けて、関係規範による差異を明らかにすることは重要と考えられる。

本研究の概要

本研究は2つの研究によって、関係への依存度が拒絶のサインへの鋭敏性に及ぼす影響が関係規範（共同規範 vs. 交換規範）によって調整されるかどうかを検討する。研究1では、それぞれの規範を遵守しようとする程度の個人差として共同規範志向性と交換規範志向性 (Clark et al, 1987; Mills & Clark, 1994) を測定し、その調整効果を検証する。研究2では、関係規範と関連する変数として個人の愛着スタイル (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010) を取り上げ、その調整効果を検証する。

本研究では、特定の関係への依存度を捉えるために、宮崎・池上 (2011) と同様、友人との活動の共有数に注目する。大谷 (1995) は、友人との付き合い方を、相手と共有する活動や役割の多寡によって大きく2つに分類している。1つは、少数の友人と様々な活動や役割を共有する多重送信的 (multiplex) な友人関係であり、もう1つは、役割や活動に応じて異なる友人と付き合う単一送信的 (uniplex) な友人関係である。多重送信的な付き合い方をする傾向が強い者ほど、特定の友人関係に依存する度合いが大きくなりやすい。本研

究では、回答者の友人関係様式がどの程度多重送信的であるか、単一送信的であるかを測定し、それが友人関係で経験される様々な拒絶のサインに対する鋭敏性に及ぼす影響、またその影響が共同規範志向性と交換規範志向性 (研究1)、個人の愛着スタイル (研究2) によって調整されるかどうかを検討する。

研究1

研究1では、日頃対人関係において共同規範と交換規範をどの程度遵守しているかを測定する尺度を用い、次の2つの仮説を検証する。交換規範志向性が強い者は、友人と多重送信的な付き合い方をする傾向が強いほど、拒絶のサインへの鋭敏性が高くなる (仮説1-1)。共同規範志向性が強い者は、友人と多重送信的な付き合い方をする傾向が強いほど、拒絶のサインへの鋭敏性が低下する (仮説1-2)。

方 法

調査参加者 大学生149名が質問紙調査に参加した (男性78名、女性71名、平均年齢 = 19.46歳, $SD = 1.11$)。回答に不備がみられた5名を除いて、最終的に144名 (男性74名、女性70名) を分析の対象とした。

手続き 大学の講義時間の一部を利用して質問紙調査を行った。共同規範志向性と交換規範志向性、友人関係の単一—多重送信性、友人関係における拒絶のサインへの鋭敏性の順に回答を求めた。その他、友人ネットワークと社会的アイデンティティの多様性の測度も含まれていたが、本研究では分析に用いないため報告は割愛する。

測度

1. 共同規範志向性と交換規範志向性 : Clark et al. (1987) の共同志向性尺度 (communal orientation scale) Mills & Clark (1994) の交換志向性尺度 (exchange orientation scale) を著者の許諾を得たうえで邦訳して用いた。共同志向性尺度は、他者の欲求に関心を持つ程度、他者が自分の福利に関心を持つことを期待す

る程度を測定する 14 項目で構成されていた (e.g., 私は人の気持ちに特に敏感なほうではない [逆転項目], 私の知り合いは, 私の望みや気持ちに気付き, それに応じてくれると思う)。交換志向性尺度は, 自分が援助をしたときに他者からの返報を期待する程度, 自分が援助を受けたときにその返報を行おうとする程度を測定する 9 項目で構成されていた (e.g., 私が人に何かをあげるときは, 大体そのお返しを期待している, 人から何かをしてもらったときは, すぐにその人にお返しをしないとイケない)。各尺度について 7 件法 (1. まったくあてはまらない—7. 非常にあてはまる) で回答を求めた。

2. 友人関係の単一—多重送信性：友人関係の単一送信性と多重送信性をそれぞれ測定するため, 大谷 (1995) と長沼・落合 (1998) を参考に尺度を作成した。単一送信性については, 大谷 (1995) で使用されていた 1 項目 (それぞれの場合に応じていろいろな友人と付き合うことが多い) と長沼・落合 (1998) の「友達とのつきあい方に関する尺度」の下位尺度「目的に応じて相手を変えるつきあい方」から選出した 4 項目を用いた (e.g., 何をしようとするかによって, 付き合う友人を変えている)。多重送信性については, 大谷 (1995) で使用されていた 1 項目 (たいていの場合, 同じ友人と行動を共にすることが多い) と独自に作成した 3 項目を用いた (e.g., 同じ友人といろいろなことを一緒に行っている)。それぞれの項目について, 7 件法 (1. まったくあてはまらない—7. 非常にあてはまる) で回答を求めた (計 9 項目)。
3. 友人関係における拒絶のサインへの鋭敏性：非言語的直接的性 (nonverbal immediacy) に関する研究 (Guerrero, 2005; Ledbetter, 2008) を参考に, 友人の自分に対する関心の欠如が伝わると考えられる 6 つの行動について, 被拒絶感がどの程度喚起されるかを 7 件法 (1. まったくあてはまらない—7. 非常にあては

まる) で回答を求めた (6 項目——i.e., 自分は長いメールを送ったのに友人からのメールの返事が短いと, 自分は興味をもたれていないと感じる, 友人からのメールの返信が遅くても気にならない [逆転項目], 友人が自分以外の人とばかり遊んでいると, 自分は避けられていると感じる, 友人が会話中に急に黙ると, 自分が何か悪いことを言ってしまったのではないかと感じる, 友人を遊びに誘って断られても, 自分が嫌われているとは思えない [逆転項目], 友人の会話中の何気ない一言によって傷つくことが多い)。

結 果

尺度構成 共同規範志向性と交換規範志向性を測定した項目について, 逆転項目を修正した後に信頼性係数を算出したところ, 信頼性は高くはないものの許容範囲内であった (共同規範志向性, $\alpha = .67$; 交換規範志向性, $\alpha = .64$)。そこで, 各尺度の平均値を算出した (共同規範, $M = 4.40$, $SD = 0.58$; 交換規範, $M = 4.09$, $SD = 0.70$)。

多重送信性と単一送信性を測定した項目について信頼性係数を算出したところ, 十分な信頼性が認められた (多重送信性, $\alpha = .87$; 単一送信性, $\alpha = .79$)。ため, 各尺度の平均値を算出した (多重送信, $M = 4.27$, $SD = 1.16$; 単一送信, $M = 3.90$, $SD = 1.07$)。ある個人のなかで多重送信性と単一送信性のどちらが相対的に優勢であるかを得点化するため, 多重送信性の得点から単一送信性の得点を減算することで, 多重—単一送信差得点を算出した。なお, 多重送信性と単一送信性に有意な相関は認められなかった ($r = -.07$, $p = .425$)。

拒絶のサインへの鋭敏性を測定した項目について, 逆転項目を修正した後に信頼性係数を算出したところ, 1 項目が信頼性を低下させていた。そのため, その項目を除いた 5 項目で尺度を構成した ($\alpha = .82$, $M = 3.64$, $SD = 1.21$)。

仮説の検証 拒絶のサインへの鋭敏性を目的変数とし, 多重—単一送信差得点, 共同規範志向性, 交換規範志向性, および性別 (男性 = 1, 女性 = -1) を Step 1, それぞれの 2 要因交互作用を

Step 2, 3 要因交互作用を Step 3, 4 要因交互作用を Step 4 で投入する階層的重回帰分析を行った。友人との付き合い方には性差があることが指摘されている（遠矢, 1996）ため、性別を要因に加えた。分析の際には多重一単一送信差得点、共同規範志向性、交換規範志向性をそれぞれの平均値により中心化した。

その結果、Step 2 から Step 3 にかけてモデルの説明力が有意傾向ではあるが上昇し（ $\Delta R^2 = .05$, $F(1, 168) = 2.01$, $p = .097$ ）、Step 3 の重回帰モデルが有意であった（ $R^2 = .26$, $F(14, 122) = 3.03$, $p = .001$ ）。Step 3 の各説明変数の効果に関して、まず、交換規範志向性の有意な正の影響が認められ（ $\beta = .27$, $p = .003$ ）、交換規範を志向する者ほど、友人関係のなかで拒絶のサインに敏感であった。また、共同規範志向性×交換規範志向性（ $\beta = -.29$, $p = .038$ ）、多重一単一送信差得点×性別（ $\beta = -.19$, $p = .032$ ）の 2 要因交互作用が有意であった²。そして、仮説に関わる交互作用として、多重一単一送信差得点×共同規範志向性×性別の 3 要因交互作用が有意であった（ $\beta = -.25$, $p = .018$ ）。その他の主効果、交互作用は有意でなかった（ $ts < 1.98$ ）。

3 要因の交互作用について下位検定を行うため、まず、男女別に多重一単一送信差得点×共同規範志向性の 2 要因交互作用の検定を行った。その結果、男性では 2 要因の交互作用が有意であったが（ $\beta = -.32$, $p = .038$ ）、女性では有意でな

かった（ $\beta = .18$, $p = .241$ ）。そこで、2 要因交互作用が有意であった男性において、共同規範志向性の高低（ $\pm 1 SD$ ）ごとの多重一単一送信差得点の単純傾斜効果を検定した（Figure 1a）。

Figure 1a に示されるように、共同規範志向性が強い男性（ $+1 SD$ ）は、友人関係の多重送信性が相対的に強いほど、拒絶のサインへの感受性は低かった（ $\beta = -.44$, $p = .030$ ）。共同規範志向性が弱い男性（ $-1 SD$ ）は、単一—多重送信性の影響は認められなかった（ $\beta = .16$, $p = .364$ ）。これは仮説 1-2 と一貫する結果であった。一方、交換規範志向性と多重一単一送信差得点を含む交互作用はいずれも有意でなく、仮説 1-1 は支持されなかった。

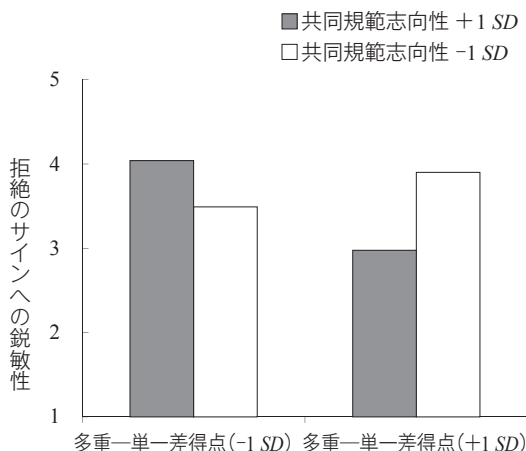
考 察

友人関係の多重送信性によって、拒絶のサインへの鋭敏性が高まるのではなく、むしろ低減するという影響が認められた。男性に限定されていたが、予測と一貫して、その影響は共同規範志向性の強い人に認められた。対人関係のなかで互いの福利を高めるために恩恵のやりとりを行おうとする男性においては、少数の友人と様々な活動や役割を共有することは、それらの関係の喪失コストを高く評価することにつながらないことがわかる。彼らは、共同規範に則って相手の立場に立ったやり取りを多様な文脈で行うことで、相手の視点やアイデンティティを自己に取り込み、自己と友人とが一体となった強固な関係を築いているため（Aron et al., 1992）、友人からの拒絶を必要以上に警戒しないと考えられる。

一方、女性では、共同規範志向性の調整効果は認められなかった。その原因の 1 つとして、共同規範志向性のばらつきが男性よりも女性で小さかったことが挙げられる³。女性は共同的にふるまうことを社会から期待されているため（Rudman, Moss-Racusin, Phelan, & Nauts, 2012）、共同規範志向性の個人差が生じにくくなり、その調整効果が認められなかったと推測される。そのため、共同規範の遵守傾向と関わり、かつ、男女ともに個人差が確認されている別の変数を用いて、予測

² 共同規範志向性×交換規範志向性の 2 要因交互作用について下位検定を行ったところ、共同規範志向性が相対的に低い人（ $-1 SD$ ）では、交換規範志向性が拒絶のサインへの鋭敏性に有意な正の影響を及ぼしていた（ $\beta = .46$, $p < .001$ ）が、共同規範志向性が相対的に高い人（ $+1 SD$ ）では、交換規範志向性が拒絶のサインへの鋭敏性に影響していなかった（ $\beta = -.14$, $p = .686$ ）。また、多重一単一送信差得点×性別の 2 要因交互作用について下位検定を行ったところ、女性では、多重一単一送信差得点が拒絶のサインへの鋭敏性に有意傾向の正の影響（ $\beta = .25$, $p = .052$ ）を及ぼしていたが、男性では有意な影響は認められなかった（ $\beta = -.14$, $p = .276$ ）。

a) 男性



b) 女性

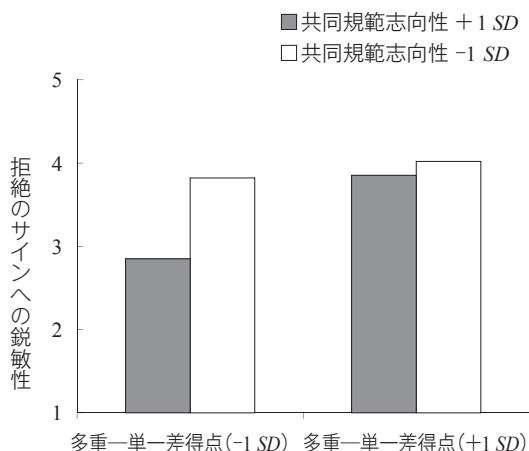


Figure 1. 共同規範志向性の高低 ($\pm 1 SD$) と多重一単一送信差得点の高低 ($\pm 1 SD$) における拒絶のサインへの鋭敏性の推定値。

a) は男性の推定値, b) は女性の推定値。

を再度検証する必要がある。また、研究1では、男女ともに交換規範志向性の調整効果は認められず、仮説1-1は支持されなかった。交換規範は、一般に心理的親密性の低い関係で優勢になりやすいと考えられている (Clark & Mills, 1979, 2012)。そのため、比較的親密な関係である友人関係を対象とした本研究では、交換規範志向性尺度によって交換規範の影響を十分捉えられなかったと推測される。そこで研究2では、男女ともに個人差があり、かつ、友人関係などの親密関係における共同規範と交換規範の遵守傾向に影響することが明らかになっている個人の愛着傾向 (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010) に注目し、その調整効果を検討する。

研究2

研究2では、友人関係の単一—多重送信性が拒絶のサインへの鋭敏性に及ぼす影響が個人の愛着スタイルによって調整されるかどうかについて検討する。序論で述べた先行研究 (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010) に基づき、次のとおり予測を立てた。まず、愛着における回避傾向が強い場合、二者関係において交換規範を遵守する傾向が強いため、友人関係が多重送信的であるほど、拒絶のサインへの鋭敏性が高くなる (仮説2-1)。愛着回避と愛着不安がともに低い安定した愛着スタイルの人は、二者関係において共同規範を遵守する傾向が強いため、友人関係が多重送信的であるほど、拒絶のサインへの鋭敏性が低くなる (仮説2-2)。愛着不安が強い人は、共同規範と交換規範が拮抗し、両規範の影響が相殺されるため、友人関係の単一—多重送信性が拒絶のサインへの鋭敏性に影響しない (仮説2-3)。

方法

調査参加者 大学生 189 名が質問紙調査に参加した (男性 70 名, 女性 118 名, 不明 1 名, 平均

³ 男性と女性の共同規範志向性の分散について F 検定を行ったところ、男性 ($M = 4.36$, $SD = 0.67$) よりも女性 ($M = 4.47$, $SD = 0.47$) のほうが有意に分散は小さかった ($F(67, 72) = 2.07$, $p = .009$)。共同規範志向性の平均値に性差はなかった ($t(139) = 1.38$, $p = .171$)。

年齢 = 19.62 歳, $SD = 1.41$)。すべての参加者のデータを分析に用いた。

手続き 大学の講義時間の一部を利用して質問紙調査を行った。愛着スタイル、友人関係の単一—多重送信性、拒絶のサインへの鋭敏性の順に回答を求めた。その他、アイデンティティの多様性、レジリエンス (resilience)、主観的幸福感 (subjective well-being) の測定も含まれていたが、本研究では分析に用いないため報告は割愛する。

測定

1. 愛着スタイル (愛着不安と愛着回避) : Experiences in Close Relationships inventory (Brennan, Clark, & Shaver, 1998) の一般他者版 (中尾・加藤, 2004) の下位尺度「見捨てられ不安」と「親密性回避」から、因子負荷量が高く、項目内容ができるだけ重複しない項目をそれぞれ 5 項目選択し、7 件法 (1. まったくあてはまらない — 7. 非常にあてはまる) で測定した (全 10 項目)。
2. 友人関係の単一—多重送信性: 研究 1 で使用した尺度に多重送信性を測定する項目を 1 項目追加して用いた (10 項目, 7 件法)。
3. 友人関係における拒絶のサインへの鋭敏性: 研究 1 と同じ尺度を用いた (6 項目, 7 件法)。

結果と考察

尺度構成 愛着不安と愛着回避を測定した各 5 項目について、逆転項目を修正した後に信頼性係数を算出したところ、概ね十分な信頼性が認められた (愛着不安, $\alpha = .69$; 愛着回避, $\alpha = .75$) ため、各尺度の平均得点を算出した (不安, $M = 3.47$, $SD = 1.07$; 回避, $M = 3.77$, $SD = 1.08$)。

多重送信性と単一送信性を測定した項目について信頼性係数を算出したところ、多重送信性を測定する 1 項目が信頼性を低下させていたため、その項目を除外した。その結果、いずれも十分な信頼性が認められたため、各尺度の平均値を算出した (多重送信性, $\alpha = .86$, $M = 4.46$, $SD = 1.18$; 単一送信性, $\alpha = .78$, $M = 3.70$, $SD = 1.08$)。研究 1 とは異なり、多重送信性と単一送信性との間

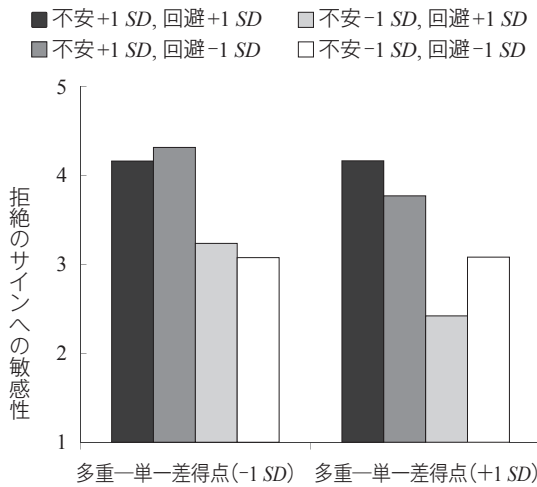
には有意な負の相関が認められた ($r = -.16$, $p = .046$) ため、両者は独立とはいえなかった。そこで、回帰分析の残差得点を用いて差得点を算出した (中島・磯部・長谷川・浦, 2009)。まず、多重送信性を目的変数、単一送信性を説明変数とする回帰分析、および単一送信性を目的変数、多重送信性を説明変数とする回帰分析を行い、それぞれについて標準化された残差得点を算出した。次に、多重送信性の残差得点から単一送信性の残差得点を減算することで、多重—単一送信差得点を算出し、得点が高いほど友人関係において多重送信性が相対的に優勢であることを示す指標とした。

拒絶のサインへの鋭敏性の測定項目について、逆転項目を修正した後に信頼性係数を算出したところ、概ね十分な信頼性が認められた ($\alpha = .71$) ため、平均得点を算出した ($M = 3.44$, $SD = 1.03$)。愛着不安と拒絶への鋭敏性との間には有意な正の相関が認められた ($r = .61$, $p < .001$)。これは、愛着不安の強い人は拒絶のサインに敏感であるという知見 (Mikulincer & Shaver, 2007) と整合している。愛着回避と拒絶への鋭敏性との間に有意な相関は認められなかった ($r = .07$, $p = .344$)。

仮説の検証 拒絶のサインへの鋭敏性を目的変数とし、愛着不安、愛着回避、多重—単一送信差得点、性別 (男性 = 1; 女性 = -1) を Step 1、それぞれの 2 要因交互作用を Step 2、3 要因交互作用を Step 3、4 要因交互作用を Step 4 で投入する階層的重回帰分析を行った。分析の際には愛着不安と愛着回避の得点をそれぞれの平均値により中心化した。

その結果、Step 3 から Step 4 にかけてモデルの説明力が有意に上昇し ($\Delta R^2 = .03$, $F(1, 168) = 8.59$, $p = .004$)、Step 4 の重回帰モデルが有意であった ($R^2 = .45$, $F(15, 168) = 9.06$, $p < .001$)。Step 4 における各説明変数の効果に関して、まず、愛着不安の有意な正の影響が認められ ($\beta = .58$, $p < .001$)、愛着不安が強い者ほど、友人関係において拒絶のサインにより敏感であった。また、愛着不安 \times 愛着回避 \times 多重—単一送信差得点

a) 男性



b) 女性

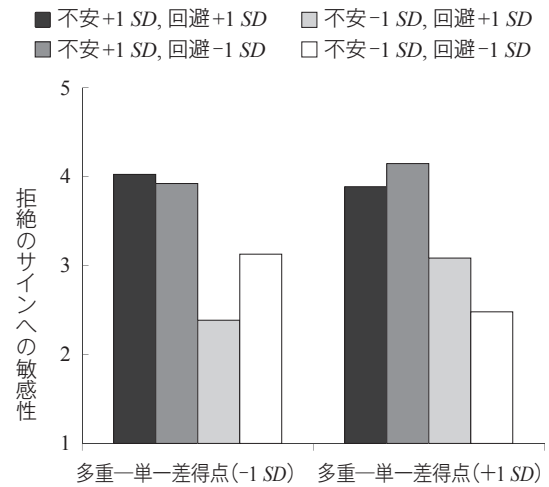


Figure 2. 愛着の各次元の得点の高低 ($\pm 1 SD$) と多重一単一送信差得点の高低 ($\pm 1 SD$) における拒絶のサインへの鋭敏性の推定値。

a) は男性の推定値, b) は女性の推定値。

×性別の4要因の交互作用が有意となった ($\beta = .20, p = .004$)。その他の主効果および交互作用は有意でなかった ($ts < 1.14$)。

4 要因の交互作用について下位検定を行うため、まず、男女別に愛着不安×愛着回避×多重一単一送信差得点の3要因交互作用の検定を行った。その結果、女性では3要因の交互作用が有意であったが ($\beta = -.22, p = .013$)、男性では有意傾向に留まった ($\beta = .17, p = .089$)。そこで、3 要因交互作用が有意であった女性において、愛着不安の高低 ($\pm 1 SD$) と愛着回避の高低 ($\pm 1 SD$) の組み合わせについて多重一単一送信差得点の単純傾斜効果を検定した (Figure 2b)。

Figure 2b に示されるように、愛着不安が低く回避が高い回避型の愛着スタイルの女性は、友人関係の多重送信性が相対的に強いほど、拒絶のサインへの鋭敏性が高い傾向にあった ($\beta = .34, p = .051$)。逆に、不安と回避がともに低い安定型の愛着スタイルの女性は、友人関係の多重送信性が相対的に強いほど、拒絶のサインへの鋭敏性が

低かった ($\beta = -.32, p = .040$)。不安が高い2群では、多重一単一送信差得点の影響は有意でなかった (不安高・回避高, $\beta = -.07, p = .624$; 不安高・回避低, $\beta = .11, p = .460$)。これらは、仮説 2-1, 2-2, 2-3 と一貫する結果であった。

考察

研究2の結果から、少なくとも女性において、友人関係の多重送信性は、常に拒絶のサインへの鋭敏性を高めるわけではなく、個人の愛着スタイルによってその影響が調整されることが示された。回避型の愛着スタイルの人は、他者が自分の要求に受容的に応えてくれることを期待しないため、二者関係において交換規範を遵守する傾向が強い (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010)。そのため、少数の友人と多くの活動や役割を共有するような多重送信的な友人関係は、関係への依存度が高くなる分、関係を失ったときに自己が多大な損失を被る喪失コストの大きい関係と評価されやすく、拒絶のサインへの鋭敏性が高まる傾向にあったと考えられる。一方、安定型の愛着スタイル

ルの人は、他者が自分の要求に対して受容的に応答してくれると信じているため、自分自身も相手の要求に応じようとする。すなわち、二者関係において共同規範を遵守する傾向が強いと想定される (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010)。そのため、多重送信的な友人関係は、関係がもたらす損得という点から評価されず、むしろ、多様な文脈で活動を共にする関係は、自己に強い一体感を感じさせる関係と評価され、友人からの拒絶を懸念する必要がなくなり、拒絶のサインへの鋭敏性が低下すると考えられる。

さらに、愛着不安の強い女性では、予測したように、拒絶のサインへの鋭敏性に対する単一—多重送信性の影響が認められなかった。一般に愛着不安の強い人は、他者から受容される価値が自分にはないと感じており、拒絶されることを常に警戒している (Mikulincer & Shaver, 2007)。したがって、友人の拒絶のサインに敏感に反応しやすいと考えられる。しかし、その一方で、愛着不安の強い女性では、拒絶のサインへの感受性に対する単一—多重送信性の影響が認められなかった。愛着不安の強い人は、親密関係において共同規範を遵守しようとしながらも、拒絶への懸念から、優勢な関係規範が定まらないことが示されている (Bartz & Lydon, 2008)。そのため、多重送信的な友人関係は、喪失コストの大きい関係とも、相手と強い一体感を感じられる強固な関係とも評価され、双方の影響が相殺されたと考えられる。

以上より、個人の愛着スタイルは、それと結びついた関係規範 (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010) と一致する方向に、友人関係の単一—多重送信性の影響を調整していた。ただし、研究1とは異なり、その調整効果は男性では認められず、女性に限定されていた。愛着傾向は関係規範の間接的な指標であるため、関係規範の違いをどこまで反映しているかは明らかでない。このような測度の間接性が男性において調整効果が見られなかったことの1つの原因と考えられる。一方、女性においては、ジェンダー規範を強く意識させるような関係規範を直接測定した場合 (e.g., 共同規

範志向性尺度) より、それらを間接的に測定した場合のほうが、関係規範の差異をより捉えられやすくなった可能性が考えられる。本研究で見られた性差については、結果の再現性も含めさらなる検討が必要である。

総合考察

本研究は、友人からの拒絶のサインへの鋭敏性を規定する要因として、関係への依存度を取り上げ、その影響が関係規範 (共同規範と交換規範) によって調整されるかどうかを検討した。本研究の予測と一致し、関係への依存の増大は、拒絶のサインへの鋭敏性を常に高めるわけではなく、鋭敏性を低減する場合もあることが2つの研究で明らかになった。具体的には、共同規範志向性が強い男性 (研究1)、安定した愛着スタイルの女性 (研究2) において、同じ友人と多くの活動を共有する多重送信的な付き合い方をする者のほうが、友人からの拒絶のサインへの鋭敏性が低かった。一方、友人関係の多重送信性の高い者ほど拒絶への鋭敏性が高まる傾向は、回避型の愛着スタイルの女性 (研究2) では認められた。これらの差異は、共同規範と交換規範という2つの関係規範と、それに伴う関係評価の視点の違いから説明できる。

共同規範が強い場合、自分の損得を考えずに、相手の福利を高めるために恩恵をやりとりしようとする (e.g., Clark & Mills, 1979)。そのため、相手とのやりとりを自分の利得や損失という点からは捉えず (e.g., Clark & Grote, 1998)、少数の友人と多くの活動を共有し、特定の友人への依存度の高い状況であっても、その関係を失ったときの損失と結びつけないといえる。むしろ、多くの活動を共有することで自他が一体になった強固な関係と捉え、相手から拒絶される懸念が低下したと考えられる。これに対して、交換規範が強い場合、相手からの見返りを求めるため、また、自分が相手から得た恩恵を返報するために相手とやりとりしようとする (e.g., Clark & Mills, 1979)。その場

合、自分と相手の関係に対する貢献を記録しようとするため (Clark, 1984), 多くの活動を共有している友人関係は、それらの関係を失ったときに自分にとっての損失が大きい関係と評価され、拒絶され関係を失うことへの警戒が強まりやすいと考えられる。

以上より、友人関係の多重送信性からみた関係への依存度が、共同規範と交換規範をどの程度強く遵守するかによって、拒絶のサインへの鋭敏性に異なる影響を及ぼしていることが推測される。本研究の結果は、関係への依存が拒絶のサインへの鋭敏性を一様に高めることを予測する先行研究 (e.g., Lemay et al., 2012; 宮崎・池上, 2011) とは異なり、拒絶のサインへの鋭敏性を制御する心的メカニズムが、関係規範に応じて変化する可能性を示唆している。

関係への依存が強いほど拒絶のサインへの鋭敏性を高めるメカニズムは、自分にとって必要不可欠な関係を維持するためのメカニズムといえる。つまり、自分が関係から得ている利得、関係を失ったときに被る損失を評価し、喪失コストの大きい関係では、拒絶のサインに対して強い警告信号が発せられ、問題への対処が強く動機づけられる。これは、相互依存理論 (Thibaut & Kelley, 1959) から予測されるメカニズムであり、宮崎・池上 (2011) や Lemay et al. (2012) で検討されてきたものと一致する。本研究では、交換規範が強いとされている回避型の愛着スタイル (Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010) の女性でこれと一致する傾向がみられたことから、交換規範が強い場合には、関係の喪失コストに基づき拒絶のサインへの鋭敏性を制御するメカニズムが働きやすいことが推測される。

一方、共同規範が強い場合、関係への依存が強まると拒絶のサインへの鋭敏性がむしろ低減していた。この場合、どのような心理的要因が関与しているのだろうか。成人愛着理論 (Mikulincer & Shaver, 2007) やリスク制御理論 (risk regulation theory: Murray, Holmes, & Collins, 2006) では、拒絶のサインへの鋭敏性を低減させる主要な要因と

して、関係における安心感 (felt security) が挙げられている。自分は相手から傷つけられることはないという安心感を抱ける関係では、相手からの拒絶を心配する必要はなくなり、拒絶に対する鋭敏性が低減する (Murray, Bellavia, Rose, & Griffin, 2003)。そして、拒絶のサインへの鋭敏性が低減することで、自己が傷つくことを恐れずに、強固な親密関係を築くことができると考えられている (Murray et al., 2006)。本研究で共同規範志向性が高い男性や安定した愛着スタイルの女性に認められた結果も、この枠組みを用いて解釈できる。つまり、互いの立場に立ったやりとりを様々な活動を通して経験することで、友人との強い一体感が生まれる。そして、自他が一体と感じられる関係では、相手は自分を傷つけることはないという安心感が生まれると考えられる。したがって、共同規範が強い場合には、安心感に基づき拒絶のサインへの鋭敏性を制御するメカニズムが働きやすいと推測される。

なぜ共同規範が強い場合に、安心感による制御メカニズムが働きやすいのだろうか。その理由の1つとして、共同規範が強い場合には、自分の欲求や気持ちに対する相手の無関心さによって、自分の価値に対する相手の低い評価が顕在化しやすく、相手からの拒絶によって自己が傷つけられるリスクが増大することが挙げられる (宮崎, 印刷中; Murray & Holmes, 2011)。安心感は、そのようなリスクの知覚を緩和し、積極的に相手との関係に自己を投入するよう動機づける。それゆえ、安心感に基づく鋭敏性の制御が優勢になると考えられる。一方、交換規範が強い場合には、相互依存関係のなかでどのような恩恵のやりとりがされているかが重要であり (e.g., Buunk & Van Yperen, 1991)、関係喪失コストに基づく鋭敏性の制御が優勢になると考えられる。

以上より、本研究で示された共同規範志向性と愛着傾向の調整効果を説明するためには、拒絶のサインへの鋭敏性を制御するメカニズムとして、2つの異なるメカニズムを仮定する必要があるといえる。これまで、少数の研究 (宮崎・池上,

2015)を除き、関係喪失コストと安心感による拒絶への反応制御は、異なる理論的背景のもとで独立に検討されてきた。そのため、拒絶のサインへの鋭敏性の制御メカニズムが関係規範によって異なる可能性が示されたことは、本研究で得られた新たな知見である。拒絶への反応制御に関する包括的な理解に向けて、共同規範と交換規範が強い場合にどのようなメカニズムが働きやすいかを示唆した本研究の意義は大きいといえる。

本研究の限界と今後の研究に向けた課題

本研究では、交換規範が強い場合、関係に強く依存しているほど拒絶のサインへの鋭敏性が高まるという予測は間接的にしか支持されなかった。交換規範が強いと想定された回避型の愛着スタイルの女性でこの予測と一致する影響が認められた(研究2)が、交換規範への志向性を直接測定した研究1では、その調整効果は認められなかった。上述のように、本研究で使用した交換規範志向性尺度が親密関係における交換規範の志向性を測定するのに適していなかった可能性がある。交換規範による調整効果については、測定方法を変更したうえで再検討が必要であろう。

また、本研究の研究2では、愛着傾向が関係規範に影響するという知見(Bartz & Lydon, 2008; Clark et al., 2010)に基づき、愛着傾向による調整効果を検討した。しかし、その調整効果が、関係規範の違いによって生じていることを直接検証できていない。今後の研究では、関係規範を測定し、調整媒介効果(moderated mediation effect)を検討することで、愛着傾向による影響の違いをもたらすプロセスを明らかにする必要がある。

関係規範によって関係への依存性の影響が調整されるメカニズムについてもさらなる検討が必要である。本研究では、関係規範によって、関係への依存性自体の捉え方が異なるため、友人関係の多重送信性が拒絶のサインへの鋭敏性に異なる影響を及ぼすことを仮定している。しかし、多重送信的な関係がどのように評価されているかを本研究では測定していない。共同規範が強い場合には依存度の高い関係は安心感を与える関係と評価さ

れやすく、交換規範が強い場合には依存度の高い関係は喪失コストの大きい関係と評価されやすい。このような評価の違いについて検証することで、本研究で考察した拒絶のサインへの鋭敏性の2つの制御メカニズムに関するより直接的な証拠を得られるだろう。

結 論

本研究は、相互依存理論から予測される拒絶のサインへの鋭敏性に対する関係への依存度の影響について、その境界条件を明らかにした。共同規範が強いのか、それとも交換規範が強いのかによって、関係への依存度は拒絶のサインへの鋭敏性を高める場合も低める場合もあることが示唆された。拒絶のサインへの鋭敏性は単一のメカニズムによって規定されるのではなく、複数のメカニズムによって規定されている。そのメカニズムの決定に関係規範が関与していることを示唆したこと、本研究の知見は、拒絶のサインへの鋭敏性の規定因についてより包括的な理解をもたらすものといえるだろう。

引用文献

- Aron, A. P., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596–612.
- Bartz, J. A., & Lydon, J. E. (2008). Relationship-specific attachment, risk regulation, and communal norm adherence in close relationships. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 655–663.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult romantic attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press, pp.46–76.
- Buunk, B. P., & De Dreu, C. K. W. (2006). The moderating role of communal orientation on

- equity considerations in close relationships. *International Review of Social Psychology*, 19, 121–144.
- Buunk, B. P., & Van Yperen, N. W. (1991). Referential comparisons, relational comparisons, and exchange orientation: Their relation to marital satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 709–717.
- Clark, M. S. (1984). Record keeping in two types of relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 549–557.
- Clark, M. S., & Grote, N. K. (1998). Why aren't indices of relationship costs always negatively related to indices of relationship quality? *Personality and Social Psychology Review*, 2, 2–17.
- Clark, M. S., Lemay, E. P., Graham, S. M., Pataki, S. P., & Finkel, E. J. (2010). Ways of giving benefits in marriage: Norm use, relationship satisfaction, and attachment-related variability. *Psychological Science*, 21, 944–951.
- Clark, M. S., & Mills, J. (1979). Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12–24.
- Clark, M. S., & Mills, J. (2012). A theory of communal (and exchange) relationships. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, and E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology, Volume 2*. London: Sage Publications, pp.232–250.
- Clark, M. S., Ouellette, R., Powell, M. C., & Milberg, S. (1987). Recipients moods, relationship type, and helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 94–103.
- Guerrero, L. K. (2005). Observer ratings of non-verbal involvement and immediacy. In V. Manusov (Ed.), *The sourcebook of nonverbal measures: Going beyond words*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp.221–235.
- Kogan, A., Impett, E. A., Oveis, C., Hui, B., Gordon, A. N., & Keltner, D. (2010). When giving feel good: The intrinsic benefits of sacrifice in romantic relationships for the communally motivated. *Psychological Science*, 21, 1918–1924.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518–530.
- Ledbetter, A. M. (2008). Chronemic cues and sex differences in relational e-mail: Perceiving immediacy and supportive message quality. *Social Science Computer Review*, 26, 466–482.
- Lemay, E. P. Jr., Overall, N. C., & Clark, M. S. (2012). Experiences and interpersonal consequences of hurt feelings and anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, 103, 982–1006.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). *Attachment in adulthood*. New York: Guilford Press.
- Mills, J., & Clark, M. S. (1994). *Communal and exchange relationships: Controversies and research*. In R. Erber & R. Gilmour (Eds.), *Theoretical frameworks for personal relationships*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp.29–43.
- 宮崎 弦太 (印刷中). 関係相手の応答性に応じた共同規範の調節——愛着不安による調整効果—— 実験社会心理学研究 (Miyazaki, G. (in press). Regulation of communal norms corresponding to partner responsiveness: The moderating effect of attachment anxiety. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*)
- 宮崎 弦太・池上 知子 (2011). 関係喪失のコストが社会的拒絶への反応に及ぼす影響：相互依存理論とソシオメーター理論による統合的アプローチ 社会心理学研究, 26, 219–226. (Miyazaki, G., & Ikegami, T. (2011). Effects of cost of relationship loss on responsiveness to social rejection: An approach of integrating interdependence theory and sociometer theory. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*)

- nese Journal of Social Psychology, 26, 219–226.)
- 宮崎 弦太・池上 知子 (2015). 被拒絶場面における関係修復行動の促進要因としてのコミットメントと受容期待：媒介過程の差異と愛着傾向による調整過程 社会心理学研究, 30, 164–174.
- (Miyazaki, G., & Ikegami, T. (2015). Commitment and expectations of acceptance as factors promoting relationship-repairing behaviors in response to interpersonal rejection: Mediation process and moderating role of attachment orientation. *Japanese Journal of Social Psychology*, 30, 164–174.)
- 宮崎 弦太・金児 曉嗣 (2007). 居住地域の都鄙性と対人関係の様態——資源獲得方略としての友人関係の分析—— 都市文化研究, 9, 2–19.
- (Miyazaki, G., & Kaneko, S. (2007). Urban-rural differences in the pattern of interpersonal relationships: Analysis of friendships and a resource gaining strategy. *Studies in Urban Cultures*, 9, 2–19.)
- Murray, S. L., Bellavia, G. M., Rose, P., & Griffin, D. W. (2003). Once hurt, twice hurtful: How perceived regard regulates daily marital interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 126–147.
- Murray, S. L., & Holmes, J. G. (2011). *Interdependent minds: The dynamics of close relationships*. New York: Guilford Press.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Collins, N. L. (2006). Optimizing assurance: The risk regulation system in relationships. *Psychological Bulletin*, 132, 641–666.
- 長沼 恭子・落合 良行 (1998). 同性の友人とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35–47.
- (Naganuma, K., & Ochiai Y. (1998). Friendship in adolescence from the view point of association. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, 10, 35–47.)
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19–27.
- (Nakao, T., & Kato, K. (2004). Examining reliabilities and validities of adult attachment scales for “the generalized other”. *Kyushu University Psychological Research*, 5, 19–27.)
- 中島 健一郎・磯部 智加衣・長谷川 孝治・浦光博 (2009). 文化的自己観とストレスフルイベントの経験頻度が個人の集団表象に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 49, 122–131.
- (Nakashima, K., Isobe, C., Hasegawa, K., & Ura, M. (2009). The effects of cultural self-construal and the frequency of experienced stressful events on group-representation. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 49, 122–131.)
- 大谷 信介 (1995). 現代都市住民のパーソナル・ネットワーク——北米都市理論の日本的解読—— ミネルヴァ書房
- (Otani, S.)
- Rudman, L. A., Moss-Racusin, C. A., Phelan, J. E., & Nauts, S. (2012). Status incongruity and backlash effects: Defending the gender hierarchy motivates prejudice against female leaders. *Journal of Experimental Social Psychology*, 48, 165–179.
- Rusbult, C. E., & Buunk, B. P. (1993). Commitment processes in close relationships: An interdependence analysis. *Journal of Social and Personal Relationships*, 10, 175–204.
- Smart Richman, L., & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: A multi-motive model. *Psychological Review*, 116, 365–383.
- Sprecher, S. (1992). How men and women expect to feel and behave in response to inequity in close relationships. *Social Psychology Quarterly*, 55, 57–69.

Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). *The social psychology of groups*. New York: Wiley.

遠矢 幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊 郁夫・奥田 秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 (pp.89-116) 誠心書房 (Toya, S.)

Williams, K. D. (2009). A temporal need threat model. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in*

experimental social psychology, Vol.41. New York: Academic Press, pp.279-314.

Yoo, S. H., Clark, M. S., Lemay, E. P., Salovey, P., & Monin, J. K. (2011). Responding to partners' expression of anger: The role of communal motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 37, 229-241.

—— 2015. 9. 9 受稿, 2015. 11. 16 受理 ——

